

通觀する時、特殊研究の時代は既に終つたと誰が言ひ得やう。吾國の西洋史學を空轉せしめず、眞に健實に發展せしめるためには今後幾多の特殊研究を必要とするのである。その意味に於いて本書の如きものこそ、吾國西洋史學建設の礎石と言はねばならぬであらう。(創元社發行、本文三五七頁、索引三一頁、定價拾壹圓五拾錢)(井上智勇)。

大南方地政論

小牧實繁
室賀信夫共著

戦局が「遺憾乍ら押され氣味」に轉じて以來、世の南方に對する關心は聊か薄らいで來た。そのやうな傾向には鳥と獸との戦争に於ける蝙蝠の寓話を想はせるものがある。殊に學者或は學徒を以て自任してゐる人々が、同じ傾向のうちにあつたとしたら、眞に嘆かばしい事と言はねばなるまい。學識が局面の變移の後塵を追つてゐるのであれば、それは如何なる誹謗も甘受すべきであらう。眞の學識は局面の先に立つて、それを作り出して行く態のものたるべき筈である。世の南方に對する關心の波動が斯くの如き危惧を浮べてゐなければ幸であるが――。

此時、小牧實繁教授、室賀信夫助教共著になる『大南方地政論』が世に出されたことは意味が深い。兩教授の著述を通覽するならば、そこに大東亞戰爭勃發以前より一貫して、如何なる事態の變貌にも怯まざる、強固な見解の開陳を見るであらう。その強固さが深い信念に由因することに氣付いた時、その節操の清純さに胸打たれざるを得ない。

本書の内容が、序文に於いて明かなやうに、昭和十八年一月より二月にかけての兩教授の講演の速記たる事は、二つの特徴を本書に與へてゐる。その一は聽者を全然地政學の門外漢と想定した講演の速記である爲に、非常に容易に讀めるといふ點である。一般に所謂地政學の本の讀み辛いのに對して、本書の此の特徴は決して輕視出來ない。しかも從來の南方に對する地政學の見解を記述した數多のものが、ドイツのゲオポリティカー達の見解に何等の新考察をも附加し得なかつたに對して、文章の上では通俗な形態をとつてゐる本書が、日本としての地政學の見解に富んでゐる事は注目すべきであらう。

他の特徴は講演の日より本書上梓まで二箇年餘の甚だ變化多き歲月を経過してゐる所に由來する。その間に兩教授の演ぜられし地政學的啓蒙の役割によつて、本書記載の若干の見解は既に一般的となり終つてゐる。その啓蒙にも拘らず最近世の南方への關心は稀薄化せんとする傾きを呈し始めた。その憂ふべき傾向に對する警鐘として、本書が今世に出た事は重要な意味を持つと言へよう。

小牧教授は本書の最初にドイツ地政學と日本地政學との關聯に極めて明快な解答を與へられ、續いて印度及び印度洋を談じて、南阿聯邦の重要性に論及された上、更に方向を轉じて濠洲及びニューギランドの眞相を解き明かされる。一方、室賀助教はより近い南方を、即ち印度支那半島及び東インド諸島を、世界全體を包む視角から論述されてゐる。しかも兩教授の見解はそれ等の分

據の地域に就いてのみに限定されず、隨所に地政學的思考に關して話されて居る事には、教示される所大と言はねばならない。多くの圖版が一般には珍しいものが多いのも嬉しい。

南方建設の重要性は今更説くまでもない。敵が猪突し來つた日本本土と南方との連絡遮斷の態勢に怖氣が如く、その重要性に眼を閉ぢるとすれば、それは必勝の信念の缺如を意味する。しかも卒直に言つて、現在その最も憂ふべき怖氣が時として世に見出され得るのではないか。此の時に當つて本書『大南方地政論』は世に敵必滅の氣慨を昂めるものとして、廣く讀まるべき使命を帯びてゐると言ひ度い。讀み易いといふ特徴は恰もその使命の爲に用意されたかのやうである。(昭和二十年一月、太平洋書館、A5版三三〇頁、圖版三三葉、定價五圓)(村上次男)

彙 報

史學科新入學生

前年の學制改革に伴ふ新しい事體として本年四月一日、史學科に本科生六十五名(内専門學校卒業生一名)撰科生七名の新入學生を迎へた。是等の學生は昨年十月の入學生同様直ちにその専攻科目を決定して、非常時對策としての一年間授業停止に關する處置確定に至るまで、從來の立前に依る講義に出席してゐる。なほ決定した各科専攻の人員は次の如くである。

國 史	本科 三十名	撰科 三名
東 洋 史	本科 六名	
西 洋 史	本科 九名	
地 理 學	本科 五名	撰科 四名
考 古 學	本科 三名	

宮崎教授の應召入隊

東洋史第二講座擔任の宮崎教授は過般名譽の應召を受けて、勇躍當地を出發、〇月〇日無事入隊せられた。出發に先立つて三月二十二日午後四時半から陳列館貴賓室で史學科教官の壯行會を催して、同教授を中心に、西田・那波・中村・梅原・藤・田村・村田等の諸教官出席、食事を共にし、また千道雄氏の點茶になごやかな時を過し八時前に散會した。